

「専門医に聞く 大腸疾患の検査と診断の進め方」

編集 市川平三郎 国立がんセンター病院長
執筆 市川平三郎 国立がんセンター病院長
武藤徹一郎 東京大学助教授
中嶋 義麿 桐生市まる病院院長
牛尾 恭輔 国立がんセンター放射線診断部
渡辺 英伸 新潟大学教授

癌研究会付属病院医長
丸 山 雅 一

本書の土台となったのは1982年1月から1年間にわたって「胃と腸」誌に掲載された座談会形式の入門講座である。市川の序文にあるように、当時活字になったのは全体の30%であり、今回初めて残りの70%も合わせて本書に収録されている。見方を変えれば、割愛された70%のために本書が生まれたとも言える。

雑誌の内容、特に座談会などのそれには「ヤラセ」の要素が少なからずあるのは当然のことである。にもかかわらず、当時、筆者はどの論文よりもこの入門講座を密かに読み返した記憶がある。その1つの理由は、話のなかに筆者の名前がときたま引用されることだったが、それよりも大きな理由は、大腸疾患の診断

と治療を生業とする者にとってこの企画がたいそう気になる存在であったというのが本音である。

当時、既に一家を成していた武藤や渡辺の話が的確であったことは言うまでもないことだが、漸く脂の乗りがかかってきたと思われる牛尾の発言が実際印象的であった。そして、牛尾の持ち味を巧みに引き出した司会の市川の技量を舌を巻いたものだった。

この種の本と言っては失礼だが、本書の特徴は、乾坤一擲の気迫を込めて書き抜いたものでもないのに惜しげもなく貴重な症例をふんだんに載せていることであり、それがまた憎いところでもある。筆者なら秘蔵の財産として出し惜しみするような症例ばかりなのだから恐れ入る。し

かし、実はこのような、本の様式とはバランスがとれないほどの豊富な症例データがあることによって、本書は口さがない人達の安易な本作りという批評にも十分に耐えられる内容に仕上がっており、ある種の風格すら感じられるほどである。美しいX線写真と内視鏡写真はこの種の本には少しもったいない気がすると言ったら言い過ぎであろうか。臨床家が1人で精根を傾けて本を書くことはもはや不可能な時代になっているのかもしれない。急速に進歩する技術革新の波と情報伝播の速度は個人の能力を遙かに越えたところに存在するゆえに、長年こつこつと書き溜めた労作を世に問うても、それは自己満足の域を出ず、また情報としての価値もあまりないのかもしれない。とすれば、本書のような試みは今の時代にもっとも相応しいものであり、本書を上梓した5人はそれを承知で読む側の対応を問うているのではあるまいか。

その意味において、本書は単に消化器病診療のためのQ & Aとして気軽に読む類のものではなく、心を静めて熟読玩味すべきものである。いずれにしても、大腸の道に志す者が避けては通れない1冊が現れたことは確かである。

B5判, 220頁, 8,500円, 送料350円,
1986年

医学書院 刊